新勅撰和哥集

下

十八

太政官文庫
和書門 類
七六一四 號
二九 函
架
五四 冊

内閣文庫
和書 類
七六一四 號
五四 冊
二〇〇 函
二 架

内閣文庫
番號 和 7614
冊數 54（16）
函號 200 4

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印
太政官文庫

新勅撰和歌集巻第十一

恋哥一

題不知　　よみ人しらす

夏かにまつるみぬ人の恋しさはやまぬかなかにしられまし
いはしへそみてやしらむ今はた家まさらぬ人をとふらむ折とは
かきつらむ山ものからやはれはてぬわか身ひとつの人をこひはてなむ
おしまかの浦にきよする白浪のたちかへりては我心かも
しかんとさらみそぬるさはつ浪にはるものからあらすなりなむ
難波江のこやに夜ふけて海士のたく煙をいかにふるさとは見れ
朝なく我まれさむき浦なくてはよるかは恋もさは我はまさるかな

女につかはしける　　業平朝臣

いにしへは身にいたつ〇はむ杯にさそはれてとかくかはるけく流れ
けしめて人につゝみしけるを

権中納言敦忠

やすみそ雲ゐにみゆるかさゝきの橋をわたると夢にみし

題

　　　　　よみ人しらす

夏なれはなかなかうかきこえは世の人ことにわたる橋は

下﨟に侍りける時宰相の御つかはしける

忠義公

冬まてもくまなく今はとまかせ人をまたれぬつる梅のさむき心を

中将に侍りける時おなし女につかはしける

中納言朝忠

いそのかみふるきをしのふ人あらはやと誰かこのましき

遊し　　本院侍従

しる人やなにをうらみん思ひあかしのうらかなしきそれ

和泉式部につかはしける

太宰帥敦道親王

打あくもあはれ抱き中くまくるしきさまれにも歌くちかる

遊し　　和泉式部

宵のまのみえひさしくておもひやるなかあかつきのこゝ道を月日を

人のむすめと物語しけるを女の親聞て

きつくまにねありしてはかなきを流れにけるを

藤原高光

あはれやもんのまれやあふさむねまれく孫をもなくてありつゝ

むらをしらす　　道信朝臣

いつれそと我世もあはれふりきれて地を恋れなりなる

相模

いそかはなれやまつはるもこきむらにまたれぬかな

五節のまゐる姫のきさきをそらしてをしつらは

くれそ　　藤原義孝

人しれぬ心ひとつに歎きつゝ流れてとこそ花見まき
五節所に侍りける女を見しらぬ人とぬと申しける
何さまにひとつにつけつゝえしける
太宰大弐高遠
ほのかにも見し女のまへをみてしかはのこるいのちはかけとしれ之
詠しらず　貞頼
山陰にほれしころほさ田にみそれてはかなくぞ思ふ身をやつさん
女につかはしける　業平朝臣
袖ぬれてあまのかりほす海のことをあふこそやまんとやまし
はし　よみ人しらず

あかなくに枝なからにおもひつゝ見しなく見しもおもはしぬるかな
見しらず　小町
浅ぢふの露つゆよりもあだなる身をしれとそ〇思ふとも逢
かくあらはゆきての浅ちはならて聞もうらむ
詠人しらず
いつしかもわかことの浦によする綱のめしけさにこそなる
恋ふる夜の袖はしほみちてかなめの内にならぬ立る
堀河院艶書の哥を人々によみて女房の
かつらしてものをとめしける時よとゝ侍りける
権大納言公實

なれといふそ忘られぬ身しまも忘れぬ恋のなみならぬ恋かな

康資王母

あさらしみちせ乃河の埋木ハあらはれぬ恋ちに年ふりにけれも

恋十首歌合に　神祇伯顕仲

恋乃山しけきを篠の露わけて入そむるよりぬるゝ袖かな

久安百首哥奉りけるに

待賢門院堀河

かくとたにいはねはふかき龍田思ひいりぬるかなしき世紀まし

袖ぬるゝ山井の志みついかてかハ人めもらさてかけをみるへき

皇太后宮大夫俊成

たのもしないはてや世の花れ木枝にはなくへやせまし心からのハ

涙川袖のみきはにうちよせて心をかへす物とこそ見え

清輔朝臣

とのつゆきあひのまほに成ゆくかみし人のゆくへやしらぬ我恋をいはてしのふる人もありけりまし

二條院御時恋の哥めしけるに

權大納言實家

人知れハつゆもさすかに世さらに袖にあまりハ涙なりけれ

百首哥よみ侍りけるに忍恋の心を

前大納言資賢

ふしハやくゝされにけりとさそ(?)ゆ(?)つゝも人のよにゆかしき(?)涙に

家に百首歌よみ侍りけるに

法性寺入道前関白太政大臣

紅の涙を袖にせきかねて今そ思ひの色に出ぬる

皇嘉門院別当

思河岩まによとむ水くきをかきなかすにも袖はぬれけり

宜秋門院丹後

袖の上の涙も今はつゝまれぬ人にしられてしぬと思へとも

恋哥よみ侍りけるに　皇太后宮大夫俊成

浄よあ門初月のいみを寺ほちへようあつひあまれ

刑部卿頼輔歌合し侍りけるによみてつかうまつりける

道因

いかにてしはしもわすれん恋の山のはに出ゆく月のなこりを

題不知　西行法師

恵まはやあふの里にやまひして名をきけはたゝえにしらるれそつらき

正三位家隆

人しれぬ恋の淵にふかく沈めの袖名はかりはなかれたちけり

百首歌の中より恋哥

宜秋門院丹後

いはぬまは心ひとつにせかれても涙の色そみえはしぬれ

源師光

我心いかなる色にそめけれは見えぬ人を思ひそめけん

権中納言定家

松か根を磯辺の波のうつたへにあらはれぬへき袖の上かな

堀河院に百首哥奉りける時恋

前中納言匡房

恋られて雲井の下草またたのみしかひも思ひとはゝ人なき

菅原仲實朝臣

年ふれと野のとよしの露やまかね思ひなるらし

基俊

浪まよりあかしの浦にこく舟のほには出すも恋わたるかな

久安百首哥奉りける時恋哥

清輔朝臣

年ふれと人もすさめぬ我恋やくち木の杣の谷の埋木

題しらず

大納言通具

人心道のおもひとこゝろを秋の末葉の露けかりけり

寂蓮法師

紅のふしほとおもふ宿山色にかはきとふるなりけり

参議雅経

浦きこちる山のあられのむくらけり心や冬に出ん

右馬権為家

おく山の日かけ乃露かさしてし人しれぬねをもてらすかな

うへのおのこともに未見恋といふ心をよませ給うける

まかりける次 御製

山乃端にわかるゝ月のかけをのみ見てしも人は人をこふらし

恋歌とてよみ侍りける 大納言實家

ゆきかへる恋路の末は絶にし人の心乃いさゝまたれ侍ける

正三位經家

はるく山とやまはふけ山路をもしるしをまてにはさまれぬけさ

入道二品親王家に五十首哥よみ侍りける

寄煙恋 入道前太政大臣

富士乃峯の烟も今は絶ぬるを我おもひのみなほもえまさる煙と

百首哥よみ侍りける時

前関白

我恋のもえてくゆれは浦人のあまの藻塩の煙とそなる

関白左大臣

わか恋は涙を袖にせきとめて枕乃ほかにしる人もなし

題しらす 八條院六條

もえこかれ枕もいかにおもふらん涙かゝらぬ煙の下は

千五百番歌合に 二條院讃岐

をちかたの神なひ河にさく花のいろねる波をとへのさしかゝし
恋三のよみ侍りけるに　殷富門院大輔
うらみわひおつる涙乃たまむすひとゝめてもおかぬへきかな
権大納言家良
恋しさの涙のたまをかくしても恋乃みたれは袖よみたれ
前関白家歌合に寄糸恋
正二位家隆
いつまてか人のこゝろにかけて我むねのをたえんとすらん
家歌合に　後京極摂政前太政大臣
吉野河いはきるなみをせく岩ほたつせきて中にはわかれて

恋歌あまたよみ侍りける
藤原頼氏朝臣
流まさる涙をしはしかけとめよ吉野河いはきにおつる白浪
前参議経盛歌合し侍りけるに
藤原盛方朝臣
なみた河せきらぬ袖をよるのまにわか涙の淵よりそふかゝらん
左京大夫顕輔家歌合に
法性寺入道前関白家参河
恋わひてなみたのこはや夜河袖乃しからみせかぬ日そなき
平経正朝臣歌合し侍りけるに恋歌

湊川袖のしつくにそおもひわたるなみたちならはし
源有房朝臣

つきもせぬおもひは湊川いつれのうきに関をすゑなん
思ひしらね
道因法師

あはれゆく思ひをけふはあつめつゝいかなる波の袖ぬらすらん
平重時

百首歌よみけるによめる
如願法師

山川の岩まの氷のうちそむかはきのさえたえそいはれ
建保六年内裏歌合によめる

権大納言忠信

まち白のわすれし河の川風よふかくむすほれつれて思ひしらす
侍従具定母

かきくらすゆきをとふ人思ふわれそまちあかしねせぬのうらさ
正三位家隆

思河かはむかうれしあのあはれきえてもあはん涙のまよふる
恋のふちとよみける
権中納言長方

からぬ浮世の川はたゝなきてへしもいかならむ瀬々をなる
皇太后宮大夫俊成

ふくともにあきこそまさる袖の涙そふ人はあまりかけぬ

有家小

新勅撰和謌集巻第十二

戀哥二

寛平御時后宮哥合哥

よみ人しらす

夏虫にあらぬ我身のつれなくも人を思ひにもゆる頃哉

夜半にのみもえけきむねはかやり火の下にこかれてまさりける

年をへて富士の山よりもえぬる我そまされる

下燃にたえぬ時なき思ひにはつれなき

清慎公

難波なるみつのあまりし思ひをつきせぬかへしつゝあはれなる

題しらす　清輔

山河乃露へそゝほのゝきもみやつらうとおもひつらん
みやまきのはのこ葉ハ秋ちるとも露のやとりとおもひすまゐ
女をかんくうら宿れ

後徳公

冬かれの道ハ露をそゝき世中にいとゝ秋ほとおもひけれ
ある
とゝあけ乃女ま

わかれもし人にてありし露のよハをかくも人をまちうらしと
に豊

静なる月乃はいつらにかし女まつうらしくな

東三條入道摂政太政大臣

うけつゝ人を衣乃露ものいてゝ涼しき人かなみえかよりまつらん

題しらす　崇徳院御製

秋さつけさをきゝぬ袖にすゝきまおの露ちる人さそ

道信朝臣

来たてゝ袖ちる人のうら衣袖やなみさのこほりかかれん

よみ人しらず

かへらぬこそめぐさ折るむしやさかり乱れや見る人のおもつく
思ひぬおまのかなかやうして秋のおもふさきにつつ
いまおうち袖山河の露はさらにそれもわれを宿らむ
秋来ぬく泉の袖よ河民のやむ時ならくおもひつらん

さはつ人かゝらの池にしむとみれはそをゆかしと恋すり　坂上
わさしいめるや河原の色のおもひそめ恋は夜にみよつて
河ふれの朝霧とかくまかりくて人に知らるゝ
ちゝ山の雪乃下草我なれや下にはもえつゝしたにもえなん

廣河女王
恋草をちから車になゝくるまつみてこふらくわかこゝろから

九条右大臣
富士乃嶺は煙もたえすたつなれと我恋こそは立まされけれ
かきくもりちらぬゆくへ女にはつゝみしもの

権中納言敦忠
ありとてもあまの河道夜河しるをせとやは人のまてしらしもとも
はまちなかうらかよはつゝしもら

右近大将道綱
さ夜ふけてつまをしもよふなれとの音にみちもとほしやつくさん
おもひしらす　よみ人しらす

ねやの花はたのめそめかくもつらき関のかけちよ
森はわれゆゑそふくと松の葉にまつ吉のかれて秋とこれ
いつはりをおもふ子のちの蜘蛛手もゆる袖のゆかりせん　ゑ
嫁とおもひて縁にあてしわすれきゆえ綰されは
なかひとの綱下はゆるくもしけりまし

秋はけふくれぬとおもふ物ゆへにゆくへもしらぬ春のなごりを おしまれ
共龍元良親王文つかはしける返事に
侍なり　源理
おくまても何かはいはせんそれ所の一歌すてよ我身のゆくへ
堀河院女房の艶書とりける時讀侍る
堀河院中宮上総
はかなくもいはやいづみは石清水わがせきとめんよしなかりけり
題しらず　大納言俊實
世の中も猶しもそのかみ神垣のあとをとゞむる水のながれを
久安百首奉りける歌

大炊御門右大臣
ゆふかけてむかしを祈りし人はなにおもひのこれ
左京大夫顕輔
年毎もかはらぬ住吉の松はつれなき物ゆへ人もしるらむ
堀河院百首奉りける時
権中納言国信
かみよしや天てる神のまもりしらぬ君をまもるとおもひけるかな
藤原為忠朝臣
住吉のちぎりはいつと我とはゝやわがみのうへ身の心なれ
建仁元年八月哥合に　寂蓮

入道前太政大臣

待えひて三とせとなる庚の上ふれぬハ職けれは
之人のおのこともあえ人恋といふ心をつかまつり
けるつゝくは　御製

よそふのこ思ひおりし年月むなしき数そつもりぬる
建保五年四月庚申冬恋といふ心をよみ侍し
侍る　権中納言定家

無きれなかくのをこかれてかゝる事ハ恋をよむ人よ
　参議雅経

ほとすしと誰とかいきむ高砂の松ハ年ふる年にも

建保三年内大臣家百首歌よみ侍りける
名所恋といふ心をよみ侍りける

高砂のおのへの松の我をもこひて人をこひつ
　源有長朝臣
庚申久恋歌　源家長朝臣
いつまていく年をこひしゆめむ(?)めかりの末の松山
　如願法師
わさふみ人の心のうちにさかえさのこかくうつろふ花のまん
　読人不知　殷富門院大輔
逢みてもなほ別のあか袖につゆもそれも何かはらん

百首歌めしける時　崇徳院御製

とゝのまて云はれしハあまりぬきさいそてや君か袖とこ世
限さへ世の関守をさへとやらは有てこそ今はこえめ

権大納言隆季

逢坂の関は世にたつ名のみありてやまぬ思ひのなけれとよそ
前関白家歌合に寄関恋といふ心を読
侍ける

典侍周子

よそにのみゆふつけ鳥の声をきゝなかてあかしつ関のとはよ

恋歌よみ侍ける　殷富門院大輔

こえてねあふ坂山の岩清水むすひもあへぬ袖をしほる覧

中宮少将

いかにせん恋路の末に関すゑてゆけともとほきあふさかの山

祝部成仲

あふさかは山は清水の名のみしてせきもる関はかたくそありける

賀茂重保よみ侍りける歌合し侍るに恋の心

をよめる

勝命法師

恋路にはさらぬ人すら関もるとたのみしものを涙さへなみ

源仲綱朝臣

あひ見ぬはさなき関守に袖ぬれておもふらんあふ坂しらすそ

権中納言長方

浮嶋ハ海よりのうら浪に一つ定めしかすみかたをいつよ
そ人
寂蓮法師
すみよしの海乃思ひねるにに守塩のさてもあさなく立帰らす
入道二品親王家五十首寄燈恋
参議雅経
うらみな難波の入江よ思ひ始ふうくやわすれめかれ
大
うみてよ親方ハさやく塩の芦ハまつて立けつゝる
正三位知家
関白左大臣家百首恋
源家長朝臣
あらせやあしの入江のむかし舟さす浪にひとしかう
恋すらうき紛れ
藤原行能朝臣
数ならぬみは海くれはあまの舟のほかれ袖ハあしりなむ
寂延法師
春霞たちしとも入江ことはかのこゝろ人を恋て
殷富門院大輔
うらみけるうきは浦浪によるの思ひはわする袖をこそ世に
皇太后宮大夫俊成
思ひやりける人のおのこともあはぬつゝま
つりくるよ
我恋ハ浪こそ磯の海樹とつかさもあまの

堀河院御時殿上にて花をさくらとて十首歌
よみ侍りけるに浦の浪を読侍ける
　　　権中納言国信
うちよする浪は花にもちるなれは浪の関に幾返りかは
百首歌よみ侍りけるに恋の心を
　　　後法性寺入道前関白太政大臣
我恋はあふそのうへに何を見むなけくのこともかす神かな
百首歌奉りける時恋歌
　　　入道前太政大臣
不見人の心そ猶もうらみぬまこそなれ涙
後京極摂政家にて百首歌よませ侍りけるに恋
歌
　　　高松院右衛門佐
彼ふつむあまれはる人を恋わびて夜ひるそれをなけく哉
　　　藤原隆信朝臣
おもひかね波もなき我袖やをしむなる浪の下草
題不知
　　　正三位家隆
春の流れ入江に浦ふかき川すゑかけてみえし人そ恋しき
女につかはしける
　　　前大納言隆房
人を恋ぬうき身にしられ涙まさり人ハ恋て待ハまれ
なる
女のゆくへを尋ねて流しける

左近中将公衡

はる〳〵てもいふかひなき物ゆへ時にもなれは花のさくよの中なれは

題をさくりて哥よみ侍けるに思事をよめる

前中納言国道

さきのよのいかなる身か思草なひく方なくかれはてにけれ

恋乃心をよみけるに　藤原親氏朝臣

うしと見るものからいかにかはりゆく人のこゝろをうらみつゝねん

百首哥読侍けるに不逢恋

関白左大臣

なからへてつれなき中の心をはたのむにもあらぬ袖の露とてそ

百首哥たてまつりける時恋哥

入道前太政大臣

わかれてもまたあふことを頼む身にゆきてかへらぬ人の果ともなれ

参議雅経

みちのくのしのふもちすりたれゆへにみたれそめにし人の心を

消ぬともあさちか上の露のみもおきゐてまちし人や恨ん

建保六年内裏哥合恋哥

正三位知家

人めのみしけきかやりのしたかくれ思ひいつとも忍ふ杜の下草

新勅撰和歌集巻第十三

恋哥三

ところさためはへりける家にわすれしける

實方朝臣

大井河のちをよきぬ(?)とむかはあれや今からわすれん歌をまれまち

女につかはしける人にかはりてよみ侍ける

郁芳門院安藝

あしきやは恋路とさへや夢ならてかよふ心の逢坂の関

百首哥めしける時　崇徳院御製

逢ことはしのふのころもあはれなとまれなる色にみたれそめけん

後法性寺入道前関白家百首歌によみ侍ける　皇太后宮大夫俊成

思ひわひむ命たえなはいつくにて行方もしらぬ恋をしつさまし

皇嘉門院別当

われはさもおしからましいまはた数ならぬ身をしのはすれはかならぬ

法性寺入道前関白家哥合に

基俊

河上にぬれてぞ恋しきうきまくらゆめのほとにもいつくさまし

題不知　讃岐云(?)

おしきしもおもひもたえぬ(?)ことのはをいふなる人にしらせぬのみそかる

京極前関白家肥後

人のうら山井の志水むすひてもなれておもふはあかぬ袖かな

後朝のこゝろを　土御門内大臣

きぬ／＼になりゆくまゝにぬるゝかな名残の袖は誰を形見ね

八條院高倉

逢事を又ハ涙も哉ぬれしとて衣を志らぬ名残なりけり

家百首哥よませ侍りけるに　関白左大臣

名よりおほくゆふつけ鳥のねさへなき別の露そこほるゝ

中宮かね

とりの鳴まつきさ別ハわかれしに思ひしらてや鳴やらん

源有長朝臣

帰るさはとのまてうごくぬるゝ袖をかくさてつらき朝方哉

恋言のこゝろを読侍りけるに

権大納言家良

うちわけてたのむすの名のひとりわひつもる鳥の音にあかぬ

名残の袖をたゝにあひみる人につれなけれ

相模

明ぬるに出る月も入かたに我なかそらにみゆる

陽成院言の合に　よみ人しらす

おもふ事なくてわかるゝきぬ〳〵の道をいかてとゝめむ

ありしらせ

ゆめとてもさめぬわかれの人の心かは枕にまたわかるゝよ

家哥合に　後京極摂政前太政大臣

わかれ路の明りをたのむ別るゝ方も月は忘れそへて

暁恋乃心をよみ侍りけるに　鎌倉右大臣

さしもなほ露のちきりもおきそはゝ暁にとおもひやるらん

恋哥読侍りけるに　八条院高倉

あかつきのつらき一ことおもふみそゆくもとまるもぬるゝ袖かな

内大臣

なかはされ袖の別の一ことをいかにかはらむ人の言の葉

権大納言忠信

暁をさらぬ命をうらみてもわかるゝけさは袖をのこさく

左中将基良

今はとて別し時の鳥の音は恋しきみのゆめのそら

前関白家哥合に寄鳥恋といふ心を読侍る　中宮少将

暁の鳥はつけしもおきて露のおきされてまたさなからよそ鳴

千五百番哥合に　侍従具定母

くれなゐに染めてもつれなき人のよそにあはぬ床に涙あまさじ

堀河院に百首歌奉りける時後朝恋

京極前関白家肥後

桂河のせにありし後ちりちりに物もいはでは歎くをまし

後法性寺入道前関白家百首に

皇太后宮大夫俊成

こひをこし河岸はにあけむいかにや涙にぬれても歎くをはこ

二条院に百首歌めしける時後朝恋

太宰大弐重家

逢みてしもゆかりしさはるる涙のなごりの袖にとゞめし もせ

関白左大臣家百首歌後朝恋

源家長朝臣

きぬぎぬのはつきさめまた逢はんと袖の別をゆるしつ かへん

別恋といふ心をよめる

法印幸清

あふ坂のゆふつけ鳥も別ちをとうき袖にてや鳴ぬらめ かへん

惣切恋といふ心をよみ侍りける

藤原隆祐

いかにせん逢ふを絶えさ命にもかへぬ身を歎つ

歎しらるる

西行法師

消えかへり暮まつ袖そしほれぬる起きつる人は露ならねとも（袖イ）
よみ人しらす
うつゝとも夢ともなくて明ぬると鳥の声には涙さそはれ
権大納言實国
現とも夢ともたれか定めけん世にこそありけれ鳥のおと
女乃もとより帰りてつかはしける
謙徳公
露かわもいくらかと成ぬらむをとこ帰るさの道　八
題不知
伊勢
ねこそもてむかひのかへしきぬ人まつ宵のこゑはなれぬる

中納言兼輔
しのゝめのあくれは君はかへりけりなと我そ出にしつ
源宗于朝臣
白露乃おくを待まの朝かほハ見すそ中々あるへかりける
女のもとより帰りてつかはしける
業平朝臣
我ならて下紐とくなあさかほの夕影またぬ花にはありとも
題しらす
延喜御製
わかそのゝ梅にハなかなかわかなつむ人をと衣とそ思
朝まつかうしけむ
太宰帥敦道親王

恋といへはよのつねのとやおもふらむけさの心はたくひたにな
し　　　　　和泉式部
これつねの事ともさらにおもひそめて物をおもふかな　逢恋
たりしらむを
夜ふかみしたくわかれし暁の恋しさこそひのさかりなれ
　　　　　　道済公
鳥はなくよいそきおき月影のはつかにおもてあけし空かな
家哥合に秋恋のこころを
　　　後京極摂政前太政大臣
みし人のねくたれ髪の面影に涙かきやるさ秋のよの枕

晝恋　　　　　大蔵卿有家
やらなかは雨となりてよ中空に夏もみえよ秋のよのとよ
恋哥よくよみ人侍りけり
　　　　　　中納言親宗
こふるねのくるしき夏れ光かり夕の雨とみるそかなしき
後京極摂政家百首云ゝと侍りける
　　　　　小侍従
やらしなき面影さへもあまよりてむすひしさやとそこといこそ
いかなりし時そや夢はみしよりはなれしよりねよなれ
恋哥にそらみ侍る家

源三位頼政

君こふる涙のかゝる袖さへその夜はもえこそかはかね

清輔朝臣

いかにくさりし故郷のちるみさ秋の夜をみさりしよりの夜かな

久安百首歌奉りける時

堀川

夜のまにみしかくもかへらぬまゝにちきりてあかぬ袖

百首歌の中にそまむける恋歌

前関白

うきなからきやとのこゝろあくかれてうらめる中に昔や絶なん

権大納言忠信

我やとにまつてはいひし夜かれたのむなるかたはに

頼しきも　藤原永光

たのましたのむもたのむむかしやとのうつゝに頼かれとも

師光家歌合に恋の心をよめる

藤原隆信朝臣

あはれなと後のうき世はしらねともいまそうきなき物なれは

法性寺入道前関白家百首歌

俊恵法師

あはれさは昔もかくそありしかと一夜のうちにそ恋ひそめん

恋しらす　しらん人もあらす

むれ侍りてみえける世の頃に残されて侍る人の

二条院皇太后宮常陸

えのしれぬ心しき秋の夕暮はわか床にまくさぬ枕つゆけに

建礼門院右京大夫

わすれしの契たかはぬよなりせはたのみやせまし君かひとこと

内よりさかりける人のことひかりすまきとて中宮に

みるのよつゝかふしもろ　高松院右衛門佐

こはえいかにそれとはなしにあるかそれもやとるか木の葉はるかきまよふ

返事をよをゆたに　中宮少将

いつもとて心ひられぬ中に人しれぬうき秋の袖のかすかなりけり

百首歌めされける時　後京極摂政前太政大臣

涙せく袖よ心やわかるらん秋の山かけを君はそなたのまて

うれしきのたゝかも知るねよ後はみゆし雨のけのきぬかけて

式子内親王

わきもこかむかし家よりも浪のしらくにてにはなきぬ袖かな

建保六年内裏歌合恋歌

前内大臣

松浦やわかれぬさこやく塩の煙のたちそふ人もあはれ

権中納言定家

こぬ人をまつほの浦は夕なきにやくやもしほのみもこかれまつ
親しらす　権中納言長方
恋そのこま乃塩干に見えかくれにさこそ袖ぬれそ
正三位家隆
心から我身は涙うきれなからみくれなゐやよひの塩風
平忠度朝臣
たのみつゝおぬ秋津もあらはれてもまつわか身のすてやられそなき
源家長朝臣
あれ行神乃浦のあまをも思ふ里の恋人を見たてまつせ
真昭法師

ふたみかた浪路にさそふ舟乃よそにみゆるかきわたる風のまにまに
百首歌奉りけるに二見浦をよみ侍りける
正三位家衡
あさなハおほえ秋をもちる二見かたわけ行袖に浪そかけける
猶念前大臣
あらしふく人の山乃松風身にしみて袖とおもひにほふ
内大臣に侍りける時家に百首歌よみ侍りけるに
旅恋といふ心を　前関白
いつしかとあふ坂山乃さはるにもよるとも袖そ涙にぬれけん
武蔵野やくへの山乃わきかたにつゆねをきとめぬ袖の白玉

権中納言定家

今ハ秋と涼しきのこゑをそれみよ宮のゆふしほなれ

正三位家隆

思のうへにふれこそ色れけふをかきりにわかすゝ見えて
ならつる

新勅撰和歌集巻第十四

恋哥四

題しらす　人麿

夕されハ君きまさんと待し夜のなこりそ今もいねかてにする

わか門の山下風ハ吹ぬとも君かこぬ夜はねくさしも

小町

こぬ人をまつとなかめて我やとのなとかこの暮かなしかるらん

たのましと思ひすてゝはいかゝせん夢なれはわかなよちけ見に

在原滋春

忘るゝと思ふ心のうきよハ涙うらぬ袖そありける

よみ人しらず

さりともと思ふらんこそ悲しけれあるにもあらぬ身をしらずして

女につかはしける　謙徳公

思ひやる下ゆく水のあひかくれ我と人とのこゝろひとつに

しらずも

延喜御製

あふまでは文通はせる中なれど人の心か通ひ路にたゆらむ

九条右大臣

むさし野の野中をわけて摘みそめし若紫の色はかぎりは

よみ人しらず

わか門さしてまつのはらなる山まさる君かゆゑこそのまさんとぞや

棹さしてむかひのきしに君はあり共

いせのあまの朝な夕なにかづくてふあはびの貝のかた思ひにて

ゆきかへりつきせぬ山の井ねはなるこそすむかひなけれ

あふ坂の関はかよへどわれてそ我ぞおもふ

女につかはしける　元良親王

あさくこそ人はみるらめ関河のたゆる心はあらじとぞ思ふ

返し　平中興女

せき河の岩まをくゞる水あさみたえぬべくのみみゆる心を

よみ人しらず

橋河さかれぬ下にぞ流れあはでゆく心思へはたのもしきかな

霧衣のへたてし我か秋ハゆふへの草葉にそ結ふ
今ハとて忘るゝ草の種をたに人乃心にまかせすもかな
人丸
むほにあわはまいる逢ふさへまた人をとふらふるかな
よみ人しらす
夕され（ヤミ）ハ道たとたとし月待てかへれわかせこその間にも見ん
額田王
忘れ川とわたれハ我宿のさくら散らし柱風そ吹
壬生忠岑
いつくともはさたかに霧にまとひて見えつゝわすらるゝの草にほひ　忠見

みつ森
わかおもひ道ハ今さらに地をたちても心ちくるぬを後の世
家女ものそ花とのつきぬさうしよ彼かり
出る人を待ほとより思ひつゝさらにもなかれ
又
家女明日香
みちさへもさそハれぬ花のかをりまつらさゆかてかけそつゝ
后宮の御前よさそひかの時ハ里にいつさて　あまき
九条右大臣以か将よ待ちかよつらつしけら
右近
わかいさてハ聖人の梶よ思ひ御よそへはつもいを見るまをあて

清様云少将に侍りける時流かしけり

武部卿敦実親王家之和

あしされ外に心乃ありやくて人の見るまかなしうる心ある

あひて袖にも侍りけれ

宇子内親王

露けき草のたもとを枕にて君まつ虫のねをのみそなく

中務

君なくて人の心もあらぬまにしられぬともあくはなとのさかく

ありしよりあまれまさりてあまりさへ袖ぬらすとも思ひしるらん

読人不知

二条皇太后宮大貳

風ふけは空にあらそふ雲よりもうかれて見ゆるわか心かな

わかしこれ世乃外をわれねとも涙の袖よ何をかくひれ

堀河院に艶書乃召しける時

周防内侍

人しれぬ袖そ露けきあふことはかれのさきのあらしさく

[illegible]し

大納言忠教

奥山の苔のけ草は枯やらて霜のこはその道をかりつ

同艶書とて読侍りける

権中納言俊忠

み清江のうちよめにさへたちまゆそよあまりあれ

百首哥のうちにもれたる名哥共

前関白

後門みなとは袖にせきかねて人のうきせに梓やそへるらん
うしと思ふ袖のうへの石田もし涙やかわらん

難しらで

侍従具定母

浦しまにあまのぬれ衣もかゝれて我か袖のうへ波

前大納言隆房

あまのかるみるをおもへそわかしに今はふたりさへよせぬ浪

法性寺入道前関白家百首哥よみ侍る

宜秋門院丹後

みやまにハ人の心もうつろふく秋のこすゑはゆふかれなき身

俊恵法師

はるゝよりこしとくれたのめの秋やいつの夜そ契りし

逢不遇恋の心を　二條院讃岐

同じ人ほかなる心をきこし露のきえいかにと何とひ問
是しらず

入道前太政大臣

忘すられしきにハ覚もいのちもいひ出しもの思ふ事に法性白家

通会右大臣

秋思ハわすてあかつきとさて衣ハかよはそとの霜のうへ

前大納言隆房

あらしつゝよるの嵐にうけてくものゆきさとなりぬるさゝの露
寂蓮法師
荻葉かふたえぬ秋中の露とく出てし秋にかゝる
藤原行能朝臣
長月乃夜毎にかよひぬるたえもせすなりゆくひのなこれさしさ
家隆卿
さかしたか袖の名に出く人の心は秋になりけりを
八條院高倉
明かた月かれて来しけれ君はまて秋をや秋乃ならしの風
俊恵法師

けさもことかはりけるひの夕風は荻の上葉をよそにきゝえん
秋来といふ心をやしらみけり
入道前太政大臣
荻のうへ乃露の風をもこゝろなき袖や露ちるらん
物思はぬ山もとやわれならぬ夜毎にあさき露の色を
内大臣
なみ人の袖まて染にし立田姫いまはさえよそに入てたゝひとえん
よみ人不知
侍従具定母
ふれくて妹か霜を玉のなもとゝしき園の月哉
中宮但馬

月草のうつらふかはる世は人の心の花かさねつゝ

藤原教雅朝臣

面かけは猶ありあけの月草にうつして袖の餘波の露

藤原資季朝臣

忘らるゝ人のつらさは夜をにぬれし袖にひとりやぬるらむいまもなほつ

恋哥あまた読侍りけるに

民部卿成範

思ひきやまたうつりかの袖の香に秋の夜ながらいたづらにねん袖とは

侍従具定母

忘られしわか身は嘆く衣の旗風はひとりそ残る夜露の枕とて

法印幸清

うきふしは数にもあまるねたき人の情をさへの忘れゆくもよ

寂蓮法師

恨みし思ひたえてもやみなましたゞ恋はけの忘れぬ身を

俊恵法師

忘れなむとおもふもいとゞ恋の世は面影をふもさそひけりとなへ

左近中将公衡

契りしにかはらぬ恨をつれなくてその契はけぬもまたなれ

前大納言忠良

世のうきもことしあるなむ面影は今もこの中さへかれもせぬや

題しらす　　　みちまさの宣旨

大方に恋しき人を思ふかなむねのうちにも見えん事もかな

　　　和泉式部

見えもせむ見もせん人を朝ことに起きてはむかふ鏡とも哉

かりのから枕は織物にをらせたりけるをあやにくに読とも字

九条太政大臣中納言に侍りける時寝覚の枕

に枕をさしおきて侍りく

　　　権中納言定頼女　母子

心には我こそ露を思ひの枕なくこそ枕をみし夜

尋ね侍りけれは　藤原頼宗女

わすれなん人の枕をたのむとのこえあやまれ

女につかはしける　藤原高光

かさねしも忘れやはつる流しわすれし人のこゝろにたのみけれは

題不知　　藤原惟成

かくしこそ夜をせきとめし涙まつ我つゝまれぬ袖の白玉

　　　和泉式部

逢事を玉の緒にする身にしあれはたえむとおもふ程はなし

捨てらるゝ人のなかはこれ涙も人のあかぬかはらぬ

　　　　こと人しらす

おもふ事を今いかさまと言ふとも涙は袖のまへに有けり

うしさらハ恋しさもさそ我思ひハみくつ路をいたしぬ命しらさん
採ちひきはのれなかるらそのたまさかに押しあて世中物
別てのあしたそ別しさ源川うこもわつくにたかきなと思へて
将とられ源中川ハとこもきねもさみよかつて物とつきぬる
ゆく舟の語る沢涙よもしられハ氷八水乃泡とうたかた
そむらて云ひ升てもそれ心のおのわつもたまさひさつかの
くれ行乃末付くも掬と思まする一夜在さつつ
よしのつさた

新勅撰和歌集巻第十五

恋哥五

みちのくにまかりて女につかはしける

業平朝臣

志のふ山忍ひてかよふ道もかな人の心のおくも見るへく

頭中将に侍ける時志のひてかよひ侍ける所の女のもとへ
文の中にかくて女のもとにつかはしける

遍照

逢ことは人にはいはて思ふ事志けきなけきのしけきみは
夜半 よそ人こそしらね

いさそしておもはましかはひさしきはなのつゆやたのまん

思ひしらね

君まちてわれのかくやのひさしきにまちわひぬれは

よそ人のゆくへもしらす呉竹のよになかれてそ

むかしのまたもあはましかはいまはむかしの

むかしのことをおもひそめてはなかくのこゝろなれ

あふことはむかしのこゝろにてつきぬるのあふくまかな

人はいさおもひやすらんたまかつら面影にのみいとゝみえつゝ

あらぬ命のおしけれはわかれてはいかにみるへきかるらん

光孝天皇御製

月のかつらのこゝの枝を思ふ浪の河風まちうらむらん

湯原王

めにはみてゝにはとられぬ月のうちのかつらのことき

貫之

こぬ人を月になさはやむはたまの秋のよなかをてらしみてまし

和泉式部

いもわかれなかめはてゝも山のはにいるひの月をまつかたそなき

赤染衛門

たのめつゝこぬ秋のよもあかしつ月をはたれの人まつとみて

太宰大弐高遠

さひしさも空に成にけりいつはりの月をあらはして

道信朝臣

物思はす月みる人たにあるものをまさるなのこゝろつれ

なしめすらん女ふれのに

よみ人しらす

名もしるしとおもはぬにをまたれし月をなかめぬよひかなきり

題し

拉撲

かすめつる月よりたのむあふまて雲井ゆくのこゝろあはれ

法性寺入道前関白内大臣に侍ける時家に歌合し侍りけるによめる

堀河院中宮上総

恋しさは霞の雲井の月みるにいとゝ心のうちにみえまし

月前恋といへる心をよみ侍る

皇太后宮大夫俊成

恋しさはなかむる空にみちぬれと月も心のまゝにあはれあ

千五百番歌合に

二条院讃岐

身のうさに月やあらぬとなかむれはむかしなからの月そのこれ

建保六年内裏歌合に

嘉陽門院越前

あさ人を待来しゆふの山のはに空たのめせぬありあけの月

題不知

正三位家隆

わすれしな秋の月の山のはにいさよふまでとみえぬ
殷富門院大輔
待人はかれはまちし月影をかくてまれにや我をまちけん
権大納言家良
なかなかにやはかなくとおもひをさそへそむる月かけ
後京極摂政家歌合に待恋をよめる
藤原隆信朝臣
あかぬ人をいかにとさても山の端に入ぬる月は心くるしきにそ
建暦二年廿首御歌よませ給ひける
正三位家隆
池水にむすほゝれる月袖のこほりはたゝよふくもみえ
懐旧の心を侍ける
大藏卿有家
思ひ出る人も昔はむかしにて月をそこゝろにしのひぬる
百首歌中に
式子内親王
いかにせん昔はまたもかへりこぬ心のうちに秋の袖
題しらず
大納言実家
ちらさけきにふかしなとせよと思ひにもみえてゆきへぬらん
左近中将公衡
さひしさの秋の心をむかしにもわひそめにける

参議雅経

鶉なくひかるむしの露よりもかくは思ひしおきしそてとそなる

正三位家隆

いたつらにむすひしちきりかたいとのまつ一秋にいれけるこそをかなしけれ

殷富門院大輔

いつまてせん今はおもひのあまりにも恋しさあまりにみえくはなきぬるかな

法橋顕昭

はかなさを恋しきも恋はてぬまよりきえぬ逢見ぬ秋をいつよりかしる

道因法師

美しき人のあはれをしらぬ人のみそこのよにまたしらぬとはいふ

千五百番歌合に　二條院讃岐

あはれくなるはかりけりな秋のたのきえぬはよのゆふへ

恋のうたとて侍りけるに　藤原重教女

契りしをみるも昔の夏風のかよふて人をまち恋しき袖かな

夜恋といふ心をよみ侍りける　按察使兼宗

なつかしさもあくなたの言の葉をもいかにさきをわすれひかな

題不知　権大納言家良

鹿のねのやまのなみなかのまの風のあをそいつくしらぬ身のはてもかなしき

建保六年内裏歌合恋歌

権中納言定家

逢ことハしの与乃夜あかれぬまてもれおすこゝろみたれなのあめん

従三位範宗

いかにせん稀なく出れる衣人をとゝめぬ袖のまゝとゝ
頼しらす

従三位顕兼

そのまゝにうらみんとしもやよ河野の頼よそく露にむすとゝて
前関白家哥合に山家の恋といふ事をよ
み侍りける

正三位知家

たゝ頼むたゝ山の庵れゆかれをかりそめにに年もへにける

建保三年内裏哥合に

藤原信實朝臣

あつまれし置その志賀山さしによるねにさそわれしかるかれ
恋しき心をつゐにうたへはゝ女はつらそうしけり

大宮入道内大臣

こ浦の煙乃よるの身まてむらうそねあふれけりな 林
家哥合に顕恋といふことを侍りける

後京極摂政前太政大臣

袖の涙山藤乃煙はれとみよ君かたらはれ立てのき
顕しらす

左近中将公衡

夕ぐれの野辺の道はみてはつれ我身の人のはかなきそれ

京極前関白家哥合に恋のこゝろを

大納言忠教

恋しさハ君か(?)へたちわかれてやむすほほれぬる雲のうへにそ(?)有

題不知　　土御門内大臣

河さめきえさ風にたちぬる浮雲のわかれわかれハ来てもしらぬ恋かな(?)

後京極摂政家哥合に寄雲恋の心を人々によ

みてたてまつりける　　前大僧正慈円

恋しわか秋の夕の雲よりも君かうきをやしられまさらん(?)

寄木恋　　正三位家隆

思ひ○あらぬむとハ又ゆふ日まつ我ぬれ袖のきぬそわかれめし(?)

千五百番哥合に　　按察使兼宗

人心末葉ゆかりしくえぬかれハ涙乃河も冬そなりける(?)

百首哥よみ侍りける時　　大炊御門右大臣

ほとゝきすつる涙の数をしもあらましぬ程まされ秋のゆふくれ(?)

皇太后宮大夫俊成

ゆふせんあまりさそとうらみし恨くも我か身のとかをしらす(?)

待賢門院堀河

きこゆしん乃うれ悔しさはとりぬにつけて忍ひ(?)

題不知　　従三位範宗

あかつき猶ハ空行の月はのこ思ひの中にゆきめくりて(?)

恋すのあまくたりこし御代々には

藤原資季朝臣

偽乃ことはなくはいかにそはわすらるゝ身をあはれとも見ん

千五百番歌合に　宮内卿

津の国のこやとはいはし山城のとはぬつらさは身にまさるとも

源具親朝臣

後世絶身のむたのみも絶遠契りかはしそれ捨る世は

恋しらす　藤原永光

かちの世とハいひそ人に別ましあはてまてこそしれぬ命を

津守経国

あふことハ今いくとせの月日へて待かひもなく身をやうらみん

賀茂季保

待わひし世ゝの契りもあはれなる逢事のむかしかたりになりにけれ

希會恋といふことを　浄意法師

せきかねつ涙の露乃命をもたえはてぬへきつらき契りを

左衛門督乃家百首歌に恋を詠る恋のこゝろ

下野

わすれ草のあふ事さへや絶なまし契りて人の忘れなむのと

関白左大臣家百首歌に遇不會恋

従二位範宗

さりとてはあか事ハ我身を家にぬるゝをいかにかへて

詠千首哥よミ侍りける

権中納言定家

誰もこのあはれみしかき玉のをを身にみたれて惜しとそ思ふ

百首哥よみ侍りけるに寄恋不遇恋

後京極摂政前太政大臣

うれしさの心乃花は喜されて人をもこゝろ思ふ時風なく

建保六年内裏哥合に

前関白

月乃まへに風も吹あへすちりゆく山の花も名ハみたりけり

中納言定頼のうちをみせてハしけれて侍る

歌よめり　よみ人しらす

あさ人の心けふとみせてハいはきの船や漕さらん

殷富門院大輔か賀に侍る時修理大夫の舞人

よそ宮のへて帰り侍けれハ抽人の車のお

かうりそてこれにかひてとりけれハ

なにてハうらもそゝ見えすて袖ハちらし抛を

おもひ人舞人そちくちひろ車の前をと

名残ハ　中院侍従

さ夜ふけてうちなく虫の声はかりしられてあはれ秋そかなしき
宮城のゝ秋の夜寒に更衣まつのしたかけ
天暦御製
これより後宮とれける思ひをいかにと定かにこゝろやさしかん
御返し　更衣正妃
君の歌をは今は待まそこそんつゝ宮の松をたのむ
女につかはしける　中納言朝忠
なかれての名にこそたちけれ逢見ぬも世のありさまとたのみ
題不知　光孝天皇御製
山川のさやけき今は思へともなれくしられは契らまし

思ひ出ていまことそゝきゆくよあけゆく
宮には朝まつとしける
法性寺入道前摂政太政大臣
ますらをか井手のゆけはなとそ梅の花にたゝさ
返し　紫式部
たゝならぬ人の心は水鶏なくゆふくれにやとしや
題しらす　相模
散もせぬ思ふ秋の夜をなつみ風の音そかなしき
貫之
見る人の花なき山はきえゆくかなしき人の心なりける

新勅撰和歌集巻第十六

雑哥一

春乃たつ先鶯のなきそくゆくれハ

選子内親王

山里の花のさかりのひとりゐるも思ひさそふと霞なきそしらす

禎子内親王家摂津

雪ふかき深山の里に行人ハあともしらしと山のやましたもなき

式子内親王

宮深くうつもれにし池水のひとつにかよふときハしるへ
まよふともよりこそ侍けれ

入道二品親王道助

春日野にまだしりやらぬ若菜摘みしか荻の焼原

前大僧正慈円

むさし野の春の気色もしられけり頃〇まだきむら草もえわたるとも

思ひしらまし

殷富門院大輔

命あらばあひみむことも定めなくおもふ春にかゝりけるかな

二條院讃岐

千五百番歌合に

さくらゐは花とみゆらんみよしのゝ山のあなたの雪ぞふりしくよ

新しらず

梅宮は渡御

霞立秋やくるよさるゝぬれたむしの錦にはふかゝもれなく

権大納言家良

みよしのゝ山のあなたにむかふ春しるにはあはむの年をへても

関白左大臣家百首歌よみ侍りけるに

中務少将

さとしさへ春の露にうつれましてたのむかひなき山里

春の夜のかはる梅花をとりて侍りける

右衛門内大臣

九重のうちにかはらぬ梅の花みてぞいにしへは春はこひしき

前関白内大臣にて侍りける時百首歌よませ侍りけるに

庭梅をよめる　源俊定朝臣

宿ちかき梅のさかえてこそあれわくる袖にも匂ひ来ぬらん

題不知　　下野

あり明の月は霞にうつもれてよにゝほふ梅のしたかせ

行念法師

梅か香はたか里わかて匂ふらん春はいつくもおなし風吹

百首歌よみ侍りける春哥　　侍従具定

春の月のそめるの梅かえに契もとめぬ人を待かな

土御門院哥合に春月といふ心をよみ侍りける　　承明門院小宰相

大かたの霞に月そくもれるもおほよそ春の名残なりけり

東山にこもりて後花を見てよみ侍りける　　粟田大納言忠良

思はてく我身さこそ心ともおもひしらなむ山さくら哉

西園寺にて卅首哥よみ侍りける春哥　　入道前太政大臣

山櫻峯にも尾にも植をかむみぬ世の春を人やしのはむ

古寺花といふ事をよみ侍りける　　祝部成茂

春をへて昔咲けん花その匂ひにたちかへるかなみよしの

題しらず　　　　如願法師

わかれにしみえん山桜花のたよりもみゆるみやこの

世をのかれ世をも宿とハ山里よこゝろをとめて侍

のちに花をみてこそみゆるなりけれ

前大納言光親

いさや我花もそめし我心そもう世にこそありけれ

二条院御時殿上のわらはのそれぞれ給ふらし

臨時祭の舞人にて南殿の花をみて内侍

丹波のもとにつかはしける

藤原隆信朝臣

ゆきずりし雲井の桜花さかりハよそにきかむとや

世をのかれて後栖霞寺にまうでて侍けるに

いにしへの花のことおもひいでてみて侍るを思ひて

うらやましくもゆく末のちのよもふつゝましき

皇太后宮大夫俊成

いにしへの雲井の花にあらねども身は忘れてもみつるばかり

題しらず　　　従三位頼政

雲井なる花をむかしと思ひしハわが身をもをしむも世

浄名居士の方丈の中にみちにしばかり花を

見てくらさむ侍る　　寂延法師

うへとそ首ゝとに成ぬる人さへ行き花のまへなれ
花をみてよるこそ待けれ

平重時

年くれて梅の木の桜花我世の後はたれかおしまん

源光行

身のうさを花にわすれてまちしまに春もくれ行の世のすさみ哉

題しらす

藤原教氏朝臣

たちこえぬ思ひの山桜春よりかけて世をすてにけん

前大僧正慈円

吉野山みねの道もおくるに花さかは又おくかへる身なりけり

落花をよめる　入道前太政大臣

花さそふあらしの庭の雪ならてふりゆく物は我身なりけり

閑居花と云ふ心をよみ侍ける

権中納言兼宗

いにしへの花も宮こそ古郷の庭の芳野は跡たえにけり

題しらす

侍従具定母

めくりあはむ秋をもしらぬ命にてなにをたのみに春のわかれは

藤原信実朝臣

暮てゆく春やこよひのとまりとも惜む心はかはらさりけり

太皇太后宮大夫四月ま(?)て桜を折てつか

りゆ久れなき

京極前関白家肥後

春ハいかに野をそかにとされて日かけ花はなふりや

四月祭乃日葵につけて女につかはしける

前京顕綱朝臣

思ふやそれかみ山乃あふひ草かけてもそれにかけん神ハ

さいしらす

相模

わきて人とまけぬ夜半草乃たけくも抑ほとかゝ

五月秋おもしき猶よそひかれ鳴ゆ久れハ

上東門院小少将

天の戸の月乃かよひちほのめくもいかなるたれくか鳴そ

紫式部

槙の戸をさてやすらひに有明乃月をわかすまたゝくれ鳴そ

なしらひゆけむしまめれ夕月夜月なすむなま

らせゆたゝまかりてゆを鳴くら

右近大将道綱母

あくれはよをひさしくたゝあやめ草かゝさよこよ知たる

の月

東三条院

あやめ草ねよあらかて今日にハかりて鳴ひとしれ

こよしゆたらは

権中納言定頼

大月毎の時乃声てよあらねはも将世よ過ハ神そあれ

らん

五月雨を詠侍りける　藤原行能朝臣

三嶋江の入江乃まこも雨ふれはいとゝしほれて刈人もなし

夏月をよめる　藤原親康

ひまわくは秋とや人のいはむ行雲乃かけも涼しくて出る月かけ

初秋乃心をよみ侍りける　式部成茂

吹風に萩のうは葉はそよくとも秋と乃心を誰かしらまし

権少僧都良仙

世にしられぬ人にしられぬ萩の下風いかにみたるらむ

参議雅経

よ乃中に萩風とのみ心を

藤原信實朝臣

まねきさゆる尾花乃すゑにつゆきえて萩の葉に女をわきて秋風ぞ吹

題しらす　源季廣

鴈の鳴の数せぬ時はへてそしる心も萩の花ちるらむ

實方朝臣家哥合のまへ乃歌をむまむねて侍るに誰となくて女乃よみ侍ける

よみ人しらすて

秋の世の心をしらすすきてにむまれ人の人かされ

殿上人あまたさそひてかけりあはせてまかりあそひてよみ侍ける　實方朝臣

浪乃まよれはひかん花落うき葉の露もくもらし

圓融院れ出家の後八月ちかき比法住寺にて
世にけりし時よりも左大臣つかうまつりひと草
そ侍りけるに　　按察使朝光　于時左大将
秋の夜を今はとくとぞみえしはなく出し様にぞなりにける
哉　　右大将済時　于時左大将
雲ゐよは我添き人おちられて野原の露や涙き（めイ）やどるらん（やどるらん）
後朱雀院御時祐子内親王藤つぼにすみ侍りけるに
そ侍りける月のあかき夜女房むかしをこひ
ありくあかしけるに梅つぼの女御まうのぼり

侍りけるをとこをひとよりこれにて侍て
　　　　菅原孝標女
あまのとをやすらふもまちはにて昔にかはらぬ月哉
五十首哥よみ侍りける時
　　　　仁和寺二品法親王守覚
むかしみし雲ゐのそらにやどりても月とは袖のねもかはらぬ
題しらず
　　　　鎌倉右大臣
あさち原ぬしなき宿の庭の面にあはれいく夜の月かすみ（けん）
さひしさは昔にかはる袖のうへにあるにいかなる月やとまる
月前懐旧といふ事をよみ侍りける

入道前太政大臣

なかめつゝたかうき世の中はいかにそむけし月はさやけん

家によみ侍りける秋哥

入道二品親王道助

こゝ里は竹の葉にけぬる月かけもむかしの世にかはりけると思へは

元暦の比をひ賀茂重保人々によませ侍りける

社頭哥合し侍りけるに月をよめる

権中納言定家

忘へしやをしねむかしの秋をへておもひかへしにかはる月を

秋夜深のつゆにそて枕もすゝりし月とも見ん侍て里王

ねぬ夜も我身ひとつの心ちし侍られは

高弁上人

月すむはいつれの山とさしもなきわか住峰のみそまさらん

後によみ侍りけるを世に侍けるによめる

清水超清

いかならん其の秋の月の鏡さへ君か代山は雲もはらさて

世をのかれて高野の山に住侍りける時よめる

参議雅経

高野山おくまて人のこゝろすむあかつきくらき月はみえてまし

蓮宋

西行法師

あくはねぬ我身をそへてなかむへき月やいつしか秋をたに経む

法印慶忠

見ふつりの影もろともてなかめし月さへ秋ののちふけにけり

正三位家隆

老ぬまてはとしのわかれと思ひしに又秋の夜は月をみるかな

源家長朝臣

忘れのみ来まし世の中に年ふれはかはらぬ秋の月かな

寂延法師

いく秋をふるらくも月はあかすれは物うきよはの猶えてしつ

侍従具定母

なこひな◯こゑりのたえしみえし月様れは老の秋乃夜よ

殷富門院大輔

今はそてみさん妹の室まても思へは秋中の月かな（世）

楽府を誦してよみ侍りける陵園妾の心を

源光行

閉ちこめしみ山乃おくには松の戸をとふやまのはに出る月かな

夕陽臺の心をよみ侍りける

素俊法師

わきてなと夕れ毎に成ぬらむ待ぬをさそふさき山のはの月

故郷月といふ心をよめる

法印道清

さを鹿乃尾上に宿の月乃影これ思へとてやしらるらん

題しらす　如願法師

この里ハ時雨にけりな秋の色のあらはれそむる峯の紅葉ゝ

藤原基綱

さほ山のはゝその紅葉いたつらに秋をおしみて行さき

行念法師

きりふ山みちの錦たちそへてたゝむとしたる時雨のゆふへ

明年叙爵すへく侍ける秋人のもとにつかはしける　藤

つかの紅葉見侍るに雨ふりてよミ侍ける

藤原雅光

人ハこれ後の秋をもたのむらんわれはことしのみ限

高倉院の御時藤つほの紅葉ゆりこせ給けるに

人々むまひろ紅葉をうつしけり

建礼門院右京大夫

吹風も枝にのとけき御代なれハちらぬ紅葉の色をこそ見れ

前関白内大臣に侍ける時家に百首歌よませ侍ける

ゆふ紅葉秋哥

源有長朝臣

紅葉ハをちりしくれの夕時雨いつれの方に秋のゆくらん

建保三年五月歌合に暁時雨といふことを読

猶てら　権大納言忠信

わすれしな人ハまたとそ思ひしかおとつれもせぬ宿

もしほやくまさりそねとも山の時雨にまさる峯の月　高階家仲

きしかたしらす　源泰光朝臣

冬くれは我宿河ありもそれ老曽の杜の名をたてゝ

冬の歌とてよみ侍りける　相模

木葉ちるあらしの風の吹ころハ涙さへこそおちまさりけれ

歌合の侍りけるに紅葉のちるを見てよみ侍

りける　前大納言公任

紅葉にも雨にもしらぬ袖の上ハむしとそふる涙なりけり

冬比里に出て大納言三位につかハしける　紫式部

うきねせし水の上のみ恋しくて鴨のうはけにさえそおとらぬ

従三位廉子

うちはらふ友なきころのねさめにハつかひしをしそよはにこひしき

題しらす　相模

冬の夜のをともつれなき暁ハさむき山のみゆる空かな

六条右大臣小忌宰相にて出侍る朝につかハ

しける　康資王母

をみ衣つらね袖も思ふかな日かけのかつらかけはなれても
忘し　　六条右大臣
かさねてそなをしのひけるをみ衣その日かけのこゝろはなれぬ
新嘗会をよみ侍ける
中納言家持
あしひきの山下日かけかつらける上にやさらに梅をしのはん
百首歌に　　式子内親王
天津風氷をわたる冬の夜の乙女の袖をみかく月かけ
五節の比侍中納言定頼内にまいりてかへるに
流かせしける　　よみ人しらす

日かけさす雲のうへ人みえしには思ひもそへしをとめ乃
歌奉りてこゝろさしける侍る雪の朝皇太后宮大
夫俊成かまゐらせしける
左近中将公衡
冬こもりなかれ絶しく雪ふらはそれたにとへつゝ
題不知　　修理大輔
忘れて年くれぬる冬草はあさ果て人をまつらむ
としの暮に琴をならして家をいてたる
身をや侍けれは　　選子内親王家宰相
埋火のきえの上へのおもかけにすみなくこゝろなへのらん

遊し

遊子内親王

ことゝの志ろ人よそにも春ハ霞とけて定かに見えし
えしらぬを

殷富門院大輔

かのかをもわすれぬ梅の匂ひよりさくらを志のふ春ハなかり
けり

入道親王家にて花といふ心をよみ侍る

法印覚寛

今かはるやとの春へと志る雪の中よりさける梅かな

年の暮れ心をよみ侍る

寂延法師

武士のとしはつもりかさねし身のとしくれ行年をは志らぬなり
ける

行念法師

ゆくとしを志らぬ命にまかせてもあすをもおもへや春を待
らん

寂超法師

君かためのゝ山ちかく花をとそすれハおもふに我かれみかよかな
り

題しらす

相模

かみよりいはふいのおもひにかはらてにそかり我身のそてにて
いとゝ寄まさ

新勅撰和歌集巻第十七

雑哥二

題不知　　業平朝臣

我袖は草の庵にあらねともくるれは露のやとりなりけり

さりともといふそうらみのやらぬへき我ひとき人しなけれは

よみ人しらす

わきかけはよはれはこと思ひて歌せしさしにみれ人はなし

和泉式部

身のうさは物をそ思ふさめてもとおもひける時のあかすは

いたせんあめのみとしそ後の世まれは袖のとまりすくなき

さかの上人

かつら原野へのあはれにつらき露もかわきもせしといふたに

心はかなくも見えぬをも今はいつくのあはれともみん

俊頼朝臣

世の中はうきをそれのみさけつゝ思ふ色さしむしろおきね

堀河院の百首哥よみける時

基俊

いにしへをおもひいつれはすきにける昔はあはれいまも恋しき

藤原実朝よりつゝきのよしを歌てとしに待つか

蔵人法師母

残りつゝ我身ハあるにもなきかな今ハこのよにあらましかれ

述懐の心をよみ侍りける　　鎌倉右大臣

いひおくことのはにのみ残りけり思ひすてにし世のならひこそ

世の中はいかにさためしものとてかわかれてあはぬ道の露そときく

百首歌中に述懐　　惟明親王

なからへて世のならひ人やおもふらんしらひくもわするゝ跡と

題しらす　　前大納言忠良

うすゝの山とことひとたてゝこそみねまてとほく成けれ

皇太后宮大夫俊成

春日山いのりしすゑのよゝをまちわたるかな

家の海を硯の水に流しても我かきつくす筆のあとやまし

源師光

もすよめからん身をなをさりて我ことのはのあられぬらん

年ふれと人のむかしの袖を四十年にわかれん

述懐歌　　前大僧正慈円

さしもふれこゝの山をおもひやるみるにをよめぬ日そうき

題しらす　　大僧正行尊

かくはかりとおもひそよし世中に何の命をかけとゝむらん

僧正行意

さつまに罕見坂はさてふかゝりしことしぬるあたしに

如願法師

濁りえぬわかれにしつれなき夜ささえもおもかけの袖の

藤原光俊朝臣

世の中は我とはいはしいつはりのことそとはむかしを思ひしき

思ふ身のはてそいふ事よ人や侍らん人まつそしける

後徳大寺左大臣

あはれ風ふくやまつる袖の心もなにかはいつくのそらかな

右大臣に侍りける時百首歌よみ侍りける述懐

後法性寺入道前関白太政大臣

いかにせむおきふしよるなきよるはにもおもひおこたる

述懐のこゝろをよみ侍りける

左近中将公衡

身にそへるおもかけも人きえぬなまし夢なりけりと

思ひしれ

後京極摂政前太政大臣

ゆくすゑは海とならむ世にたへ人の心のほかにかきぬる

寂蓮法師

そむきても猶うき世のみ世間からはなれたる心のうちにをなき

文集天可度の心をよみ侍りける

藤原行経

はかなしと世中にとりけるみをつくす人の心そあはれにたふとき
ことし世後のゆくへ大原山にすむ人の事なとを
きみかはり給ひける法然聖の御供養の時
師のかたはらにまかりけるて歌よみ給ひけるに時
母のしけ給ひけれは河の事にたくらへてよみ
給ひける

法師聖人

ふるさとは山人をとめる村雨もさそなふるらむ
歌ふ知　平泰時
世中にあさいはかなく成にけり人のはかなきものにて

高倉院御時つこの参せさせけることを給ひけるに
よみて給ける　西行法師
給ひてすみけるをとまて世をするも今もあるなる人は昔なれは
たのしれきこくかまて河をおちの名残をはに染つ
醍醐乃山家のありて延喜の御即寺とこそ
よみ給ける　中原師季
なほさかり世のはかなしにしてはなきをとはれ給ひてみるもの
内大臣は給ひける時家の百首ならむ述懐の心を
前関白
河浪をゆくむかし舟人のこゑはかなれ給ひてと

と乃こゝろ遠懐すつゝまつかうれしきは

　御製

かりぬしき方のさまにて夜しき波ゝ昔をおもひ侍て

遠懐乃こゝろを読侍る歌

　内大臣

いにしへ跡をわすれてこそ三笠山みちけるひくさまにて月をみるらん

定家少将よりかゝ侍て月あかき夜秋よめる

けふを見んたくねしこよひはかりしもあ

　権中納言定家母

三笠山みちぬとたかし月影は今そ心乃やみにいづれぬる

千五百番歌合に　二条院讃岐

けさそ見し人のしら露秋の月やまちかくも照りまさるらん

後の世のちかきをおもふ身のうきてすむ君が恩にあはれなりけるき

源為相一周忌人々よみける歌の題にて秋ちかく成

侍りしに読侍りける　道信朝臣

雲の上の露けき夜衣ぬきそへてさまにまてん程をこそまたれ

以中将ナ侍りける事ありて内にかへり侍

て内侍のもとにつかはしける

　謹徳公

なつかしや雲の上乃とおもふにそこの跡もかゝるとゝそ覚れ

花人とそかつよみ給ていふくたかくて仰とも給ひを
是ハ　藤原相如
めくりあふ雲井にまかれてわかれのいろかはまさりけるきこしめして給ら追給ふ
圓融院御製
あまの川のやかて別の道ハ深まむもしも海ゆきぬると
行幸にまゐりてそ大将にそ年久なりぬると
心のうちに思ひつゝけ給ふ
同大臣
つかれやせ使のおほせ成されそくやまちかとに白すら花

花乃枝まなしく是向と倚えなりうる外に官
給ふそ外記のまゐりとにまゐりておほせ給ふ
権中納言定家
桜さ海をたる民乃つきせぬ御調物二ときよくも命なり
関白左大臣家百首よみ給ふ眺望
百敷のこゑをありくはくまさぬよむり山のを見ゆ月
建保四年百そのよしゝ給ふ
参議雅経
うれしさもつらさもわれは神まかせてハおほかなとこそ根ろ
日吉社にて述懐乃心をよみ給ふ

正三位知家

あふ坂のゆふつけ鳥も我ことやこゝろしる人のわかれをしらん

暁哥とてよみ侍る

前中納言定房

関こえて旅の宿のあけかたは鳥よりさきにいそくわかれさへ哉

按察使隆衡

鐘のをと我袖そむすひ枕なん今はなほもあけゆくの空

参議雅経

身のうきにたちゆく霜の鐘乃音をきゝてかはらぬ暁そなき

藤原家経朝臣

あかつきの鐘そあはれをうちそふるうき世の夢の覚る枕に

遠鐘幽といふ事を

入道二品親王尊助

と山わしのたかねをくれはにほりやさらぬ鐘の音哉

暁述懐乃心をよみ侍りける

正三位家隆

世をいとふつきそねさらん秋の夜の寝覚よりゆく鐘乃音哉

清原元寛

身のうきをおもひつゝねぬ暁もすゝろぬ露の枕をそしる

袖ぬらす

後鳥羽院下

なにとなく杉まれ秋の山さてしくれ目にかれは猶そかなしけり

寂蓮法師

はかなくもむすひさためしたのみて入ぬるのちまかぬ袖の外

法橋行賢

はかなくもきえしそらのまにあさまかけたる橋の上久

前参議俊憲

あさくとも何となく思ふことのなかれてとしふるとも暮しつるかな

源光行

明日とあらは今日ともたのまれやいかにせむ人の世の中の暮て背なかりけり

前中納言

入道二品親王道助

これのこころをこのみにかけてさき後もくもなくこそ見えけるさき之灯

従三位範宗

ちさとまての露をおくもむすめのうちに花のうつろふ秋の蛇

述懐歌の中によみ侍りける

侍従具定

ありあけの雲と雷もあとなきをゆくへも知らぬ我身なりけり

方磬をうち鳴らす声の袖はなれておきえ

侍りけれはよめる　上西門院武蔵

更よるは我よの猶のみなすこさへは鐘の声きくうちにたつ

題しらず　　相模

月影を心のまゝに詠かはうちそへてなくさめまされる

霰こほり冬の河せにかはるらし千鳥の声も思ひけるかな

俊頼朝臣

難波かたこきいてゝ見れは詠ぬる人は霞の面白のかたや

みつ通ふ道のかひともみえはほにひとつ出へきかたとこそなれ

僧正円玄病にさふらひて久しく侍りける時よみ

侍りける　　権大僧都禅覚

法の為をしゝ山は苦こめて峯にみし月身もやまよはん

文治の比をひらかれ千載集えらひ侍し時定

家のあしよまつかはすとてよみ侍りける

為円法師

わかのうらを芦辺下まて楽すひとつらへつゝ道ぬなれは天にきこえん

聞し時よみ侍りける　　菅原為長

かれつもる北陸の山のとしのむかしに桜むは行なりき

寿永二年大かたの世しつかならす侍りし比よみをき

て侍りける歌を定家かもとにつかはすとてつゝみ紙に

書付て侍し　　平行盛

なかれての名たにもとまれ行水のあはれはかなき身はきえぬとも

題しらず　　法眼宗円

わかの浦に忘れぬおもひありし夢すきしかりに打やさそ 南

釣念法師

月よひ若きかれ花やいつまて也秋房まうて世にわすれらは涙

西行法師自寄哥を百合につかひ給て判乃詞

あつらへ給ひし小まろにくはしかりける

皇太后宮大夫俊成

哭ををしへ哭乃う入にまよへとうんかのうかゝ海の女やあれしかるし算

おし

西行法師

わかれからに渡来らきめる螺てはうけらうしもれ流されてこゝろ

源氏の物語をつきそれ與もさ付られて給ふ

従一位麗子

ちりとけきる此給へはこむけもわうちらへくはなとるみよ

花不知

和泉式部

春やらる花や咲きもとまりきさ谷れてこの帰木の方は

貫之

春やいつし花やはらん物思ふ身に付の物来と世をそ見るは

旅中偶々附述懐哥

後京極摂政前太政大臣

旅ねのはまをおそまうしみ山来のしかふやは若よむかれ果なん

くゆりおきも里比もんを中はされともありやまさぬ身にくれならふ

ひとりごとひとのくはくらさ
　　　　　　　　　鎌倉右大臣
山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わかあらめやも

新勅撰和歌集巻第十八

雑歌三

世のかれて後四月一日法眼観豪とふらひ侍
て　　　　法性寺入道前摂政太政大臣
とりかふる夏の衣はうすくともてたちかへるの衣としも
色し　　　従一位倫子
まださらぬ衣の色ならんて君かあはれみるそかなしき
かねるさん横河よのかりて出家し侍りける時
あはせてうしかて給せりける御返
　　　　天暦中宮

露霧の井わくさにとくされハ床より心をくりかへしけらん

高きんよ河よ侍りけるにをくりまかりてよみ侍

けり　東三条入道摂政太政大臣

おくりをしむよかハの忠有きなん源乃房にやしむよ家にけるハ

おそ一時恒徳公房湯治よ侍りけるかわりのおほよ

なか侍くうるさるよ太納言のもとよ侍りてき

て侍りけるをなくよみ侍ける

大納言師氏女　　高光妻

それとみうおもし三笠の山の井おけるも袖乃ぬれ渡さる

右近中将成信三井寺よ侍りて出家し侍　けれ

けるよ称名寺つくられて室をしむにとひつけ侍　ける

一条左大臣室

をしむのまとみすハ淡もうち海お君か山ちよ河を出て極

母乃病おもくなり侍て出家しとも侍りける

きせく侍ける紫をもまうりてはなくつせて

よみ侍ける　　右近大将道綱母

蓮乃露になるへくと出すも袖ぬれ渡さるともの露　けれ

法華経をきて人のもしよつるをさとてよめ

れ　　　　　中務

なき人の言の葉をつまれてさきわかれをやられなく袖をぬれ　ける

うしろきて抄出して世のかゝみともなりぬへしてよみて
侍りける　大納言清蔭
ひとつも世はなれぬ我身今はあれはいかにてそよみてまし
後一条院乃御時おほやけ世の中まりける年乃暮
かの家にまゐりてよみ侍りける
権大納言長家
春宮とまうしゝ御をもひかりのまつしくさへいとしくはるかによるかれけり
思ひし　出羽弁
わすらしきはひかりてもおもふにたえかねてあそひまうけ侍りける
九条太政大臣のみまかりける年新嘗會の比
此女房につかはしける　藤原高光
君かためのよりそこの門はましとはわれはその日影をみれはかなしさ
後冷泉院くれさせたまひて後条院雅清出
家し侍りて多武の峯にまうて侍りけるあいたさま
小弁なりける所につかはしける
内大臣
いかにて世の中にはおもひをきてもなにかかくらん
迄し　左近中将雅清
涙のみいかにしてか後のなをとはふ道は家出してよめる此墨染の
袖
此の秋乃いかにひとりめくれ思ひ行きてよまむ侍りける

のもとに　　　　　　　　権中納言国信

春すきし草の家のよるしもあはれてさ捨くよねしれ
くさりとそ薪つきにし煙とも聞かはさらにこそねぬ日れ
ねゐのまさけききとも夜半の煙のからく惜てそれなりけり
たえて法華経よりて花葉をとこそ捧
侍るかり　　　　堀河院讃岐典侍
法をこふ源にまつ山道ちやすみちしと思ふさま満ちん
貞信公うせ侍りてのちかの家に泊りてよう
侍りける　　　　九条右大臣
切ゝおもひ背くとそかゝりけりなきのこしけ花さ散らさ給

天暦八年故きさいの宮かくれさせ給ひて又の年
御誦経せさせ給ふ桜のたてりけるこの下に入て侍りける
花をみてあはれにみえけれはむかしを今はむかしすゑ方にかきつけ侍りける
式部卿敦実のみこにくれ侍りける返事よみて侍りける
　　　　　　　　中納言兼輔
咲かぬまに風はあれとも桜の花さくら人の世よりは久しかりけり
後冷泉院の御時うへに侍りける花梅を女房の
かはつかはしけり　　　大納言忠家
はかなくも花さかりを見るかな昔にてみしかさねの袖はわかれて
題しらす　　　　貫之

さゆふまそおもふ人のよそなからは山のゐしるそたなけれはなり

みよしのゝ御舟の山にたつ雲の常にあらんと我思はなくに

人丸

閑まつりれさらしに夜はよかりかふつてヽ文

なきつかりのあふ乃人も月は何よりけり秋のよを待

仝

猪熊公

志く露ハむすひやまるゝと花落ちてさきまみぬ秋かな

ちとしらす

桐境

朝かほの花はやしる露のまハ世にもひかりをまつ月とさそ

後京極摂政前太政大臣

おりかへすまちかねてしも白露にぬれゆかへる鶴かゝの花

入道前太政大臣

ちや世にしたふ舟人のいさとえぬれのあかれ世の中

前大僧正慈圓

あすは山秋の旅のみ山ふかく人のおもひやるらそあん

俊恵法師

さみたれの山ころもひも網かゝりといひくなかなし人もまつは

源有房朝臣

猶まちてゆく駒をみても秋あかれひつのおもかけを

先里

正三位家隆

ちかひもありその命を救ふかきりなきよをもいとふ心ならひ
なき人の境を仏になせ給ふらんか
前大納言忠良
うれさはみるもひとゝせまて境かけさかなまてくこそ侍らされ
歎きよこれそうき世の理をもしらぬしたくさあきをしまれ ゆきき
従三位雅すくれ給はけれは秋月をみてこゝろに侍
りけれ
入道前太政大臣
あはれなり又とむ秋のそらなる空をそれとも月はやとり
なき人をと思出ても給ける
八条院高倉
秋ならてあかつきの人乃面影のあはれいくとせ年経ぬらん
公守朝臣母身まかりける時左大臣乃もとへ
侍りける 大納言實家
ゆくも秋とまるもさあね露なれとおもひかさねてはいかゝやせき
返し
後徳大寺左大臣
思へともうつゝかはゆく秋なれはかなしさにけくれたる心を
一条摂政通宗朝臣身まかりて後常にかよひけるに
侍りける文とものこひ給けれはつかはすとてよみ侍
りける
大納言通具
手にならすてこれをかたみと思ひきや今はと偲ぶあたりなりけり

皇嘉門院かくれさせ給ひて後乃まうで念院
の御もとにて色紙に給ひ侍り後成仁許につかはし
ける
後法性寺入道前関白太政大臣
さえりし世のまみえそめたにかれも秋のこゝ深き名をいかにと
母乃忌ひにひかし山に侍りける時よみ侍りける
内大臣
ちるむいかゝこれぬる村にうらみぬ木もちてもとぬ袖の露よ
周忌をそくよみ侍りける
なみあはれなり世をおもふにも河面乳はえてしほれ
病にわつらひ侍りける比新少将まかりて

素覚法師みまかりてのちはかしるしまかり
賀茂重保
鶴乃林乃霧の秋かをそめありまして深くいりにし人の跡
後京極摂政かくれ給ひける時よみ侍りける
藤原親康
うつのこ葉といふみてをのつからあたなるさためな
賀茂重保身まかりて後つねに許に侍ける
かものはまかりあひて過をおもひてよ
人をよみ侍りけるに
覚盛法師

うちむれてかゝる宿ハ昔にて面影のこそわかし也ゟ

世を遁て後氷色述懐といふ心を読侍ける

藤原親盛

かはりゆくなけはむかしを思ひ出て浅くもむすふ山の井の水

まいりらす

前大納言光頼

ゆく人のむかしをしのふこゝろ山の井は汲てそすますむ世なるらん

親乃後母の男為にかくれによみ侍る歌

法印覚寛

さきらかる男を先たて此後ハさてむ利そいとゝ明き

後の余所にそれさせ給そ身くも侍めらす

と思てよみ侍る　平信繁

それしと歎きつゝ過しへぬきこめる此世の名のこる侍る

老の後述懐よみ侍るに

祐蓮法師

をとろへぬ命を惜そわかれぬるきさまを別かな

入道大納言のもとに侍りける時よみ侍る

左近中将基良

拙ことふかれわのみをそめ出て洞のすみむし時のまゝ　あさき

僧正範玄男をまうけて後よみ侍る拙もあさき

あまきりしゆて雨あかりけり時

法印円経

いかにせんたのむ生涯のわかれより未来まてこそ猶まよはし

小侍従身まかりて侍りける時よみ侍りける

法印昭清

うき世へはさそひしかねと此ことは別くあかねうき世に侍り

大納言基賢の母なくなりて侍りける時誦経をさせ侍るにかくよみ侍りける

中院右大臣家少将

別れし日はいくかふたなきよもむかしの人といふかなしき

八条院かくれさせ給ひて御正日八月十五夜なりけるによみ侍りけれはよめる

藤原信実朝臣

やまのはもけふを限りの空なれとわれくもらしつ

父身まかりてその後月あかく侍りける秋蓮生法師のもとにつかはしける

平泰時

山のはにかくれし人は見えもせてへ入月はめくりきにけり

蓮生法師

なれにし人のかたみは月をみよこころのほかにすめる秋かは

文集親愛自零落存者仍別離と云ふ心をよみ侍りける

八条院高倉

おもかけの河瀬の淵をもいかにせむさらぬ別ある侍りける哉

題しらす　勝命法師

はさめなきよにたえせぬ水のなかれの関せもわたらさらん

報恩講といふことおこなひ侍りけるによき人の

名をとなへさつけ侍りける

前大僧正慈圓

よろつ人のうへにかけたるめくみをそわすれしや昔ならさらも

今かはみつらん

新勅撰和歌集巻第十九

雑歌四

亭子院大内山におはしましける時勅使にてまゐり

て侍りけるにしら雲のたちのほりけるをみて

よみ侍りける　中納言兼輔

しら雲の九重にたつ峯なれは大内山といふにそありける

題不知　よみ人しらす

山城のくせのさき坂神代よりはるははりつゝ秋はちりけり

久迩の京のあれたるをみてよみ侍りける

みかの原くにの都はあれにけり大宮人のうつりいぬれは

春日社に百首哥よみてたてまつりけるに　橋寺

皇太后宮大夫俊成

数しらぬ峯のこのはのちりぬるハまつかせも宇治の橋
百ことに待けるに早秋のこゑ

内大臣

吹そよく風にたなひく山城のいはたの杜の旗乃袖

建保四年百首哥たてまつりける時

僧正行意

山城のとはたのもりの夕時雨そめぬみとりは秋そかくるゝ

名所哥よみ侍けるに　寂身法師

さくらとハいつれかそめむそめぬこのはの杜の梢なり

真昭法師

飛鳥川かハせの音も聴やらてつゝみにふく嵐の夕風

題しらず

よみ人しらず

世中ハなにかつねなるあすか河みなせ遠そめてなるへき ひとなる

中納言家持

千鳥なくさほの河せの清き瀬を駒うちわたしいつか通ハん

入道前太政大臣

春ハ花冬ハ雪とてなかめつゝさそひくる吉野山

正三位家隆

いにしへのいつの世の種にうへられてすみよしの松のこゝろひあらん

前関白家哥合に名所月

源家長朝臣

いにしへも帰りさけ今やみなき山かくしけて出る月影

百首哥よみ侍りける　後京極摂政前太政大臣

久堅のなかねよみしいにしへ山里は露の帰りともなき

題しらす　讀人しらす

いとまあらはひろひにゆかん住江の岸によるてふ恋忘貝

和泉式部

住吉の有明の月をなかむれは遠さかりにし影そ恋しき

其子流のかまに流のまつりて住吉の浜そしるらん

一条右大臣　恒

住吉の浦に波わくる岸の波そ潮みつ時の花とさきける

同しみゆきに難波の浦にてよみ侍りける　太宰権帥公教

難波かたしほみつ浪の夕くれはつまよふまさき河の都のなきさ

題しらす　讀人しらす

世中ともかくもなからの橋ならはかへりみるそこそ恋しかりけれ

名取川なかれてあしの屋

正三位忠隆

みかきのまくにかゝれる松の葉のつまもおもひたゆみかしらなゝ

布引瀧をよめる　藤原行能朝臣

ぬのひき乃瀧のしら糸なつくれはたえすそ人のいてゝよしゆかん

百首哥に紅葉をよみ侍りける　入道前太政大臣

下紫まて山のまゝに深くなる時雨は夜にもまたすなるなへの杜

伊勢國下り御幸の時よみ侍りける　安貴王

いせの海おきつ白浪花にもかつゝみていもか家つとにせん

旅乃哥よみ侍りける中に　正三位家隆

伊せの海はあま乃まそての浦吹こしかへる浪のひまもなき

名所哥よみ侍りけるに　大納言有家

旅ねする磯のまくらにしれ鈴鹿山おろし吹らし夜の浪つく

表浦月といふ心をよみ侍りける　家長朝臣

あかさらいちし満の表の月海士のさくかへしするも見し

志らきそののかりまそよみ侍りける　中務

ゆきをハおりはへて○ハふりしきつもれるにきえ思ふ山よ

前関白家歌合に名所月をよみ侍りける

正三位家隆

むかしたれ木のまの月におもひけハ秋もまちさめ峯の山

藤原光俊朝臣

まちみるやさんも清し白妙の浜名の橋の秋のよの月

読人しらず

題しらず

恋しくハ浜名の橋をそひみよ下ゆく水にうけやとまると

平兼盛

まつかねのうらに如く下ゆく時雨し

大中臣能宣朝臣

浪よそしまあか

ゆるきなき富士の山のやとりを立ぬ煙をこゆし

家五十首歌

仁和寺二品法親王守覚

嶺しの旅ハそれもこそ思はまし雲かゝる上に声たつる

きか宮

名所百首歌たてまつりける時よめる

従三位範宗

よるもなほ消ぬかひの山かけてしるやつもりの白雪

いはとよく恋わたる涙のうくも人まつ時にあはなん

たいしらず

さゝ人

百首歌に

後京極摂政前太政大臣

足柄の関路こえゆくしのゝめに一むらかすむ浮嶋の原

題しらす　　小町

むさしのゝむかひの岡の草なれは根をたつねてもあはれとそ思
よそ人しきを

みちのくのまかきの浦はにこよひ波の立よる人さそふ波そ
前大僧正慈円

ふみしたき菅のまつのつき橋をつれなきやふるき宿
とふ人もなきまゝにてはこそ待れ
能因法師

よのなかのうきにはよしなきのまつのへたてに
天禄元年大嘗會悠紀方御屏風
る

清原元輔

年ことの涼しさになれてまた秋風はさそふくもなし
山よりのかりくらしそ月をみてくらさん待る
前大僧正慈円

大かたの秋の風に雲晴てかゝる山の出る月そさやけき
題しらす
後徳大寺左大臣

春きそへは花とやみんをのつから桜木の枝にかゝる白雪
參議雅経

花さそひよはのあらしにさくらまつ枝の音に霞
伊勢の物使そ甲賀のむまやにつきてよめる

同　　　　後京極摂政前太政大臣
ちらすなよみかさの山をめくりゆくせ瀬のうやまの川浪

題しらす　　よみ人しらす
今よりはたしなかはのなかれてもうらみんかなしき

寂蓮法師
しくさくきえてはあさ衣袖ぬれてみかねしくらしかゝら

しかれく露にぬれつゝ人はたゝ袖をしほりつゝ

源有教朝臣
ゆふされはあさまの嶽の煙こそ年へてきえぬ思ひなりけれ

題しらす　　読人不知

みちのくにありといふなる名取河の瀬さへふかくたのみて
しか

陸奥守にまかりける時忠義公のもとより送り
侍りけるに　　源信明朝臣
あけくれはまくらの下をなかれつゝ袖のしからみのみそかく

題しらす　　よみ人しらす
つなてなはいさその山河谷ふかき草のはやせにさそはれつゝ

依所言あまるといふ侍りけるに
清輔朝臣
思ひの人のみえこそ波のさくらもあらしの末の松山

題しらす
祝部成重

心ある海士のもしほ木たき捨て月まちあかす松かうら島

寄露恋をよめる　寂延法師

思ひ出る事忘てく下草にむすほゝれけり露のよすか

読不知　平政村

宮城野の木の下はしもさえて露も涙に海さる枕やなり

天暦御時屏風哥　信明朝臣

むらしくれはるゝ峯つゝみたる山の雲井は雲ゝ消るらむ

百首哥　奉りける哥　大納言師教

冬枯し色もなき峯の雪はれてよするもみえしかたらの山

読不知　よみ人しらす

鶴しらいつみの河乃みなせとききし人にあはてしらす

前関白家哥合に名所月といふ心を　内大臣

ゆふなみにあらはれしかみの世は大和志まを出る月影

読しらす　大納言蔵人

まつ浦のいそ山の末みたれていとはしはらんやらう

後京極摂政前太政大臣下

浪たちしあら磯せきよるへよもすから吹く沖つ塩風

入道前太政大臣

春秋の也斗乃居ともて海をわたる玉札のかしれ関守

読人しらす

いもうとめ玉をひろふと紀の国のゆらのみさきにけふくらしつ

ともし火かき漕くらし いもか浦そこの浦にともゆるまへ

正三位家隆

時しあれは桜とそおもふ春風の吹上の浜にたてる白雲

名所百首よみ侍りけり

前参議教長

浪の花吹上の浜の浦風に時しもわかぬ雪そ積れる

堀河院に百首奉りける時河山の寺

権中納言国信

わきみちの露やあらた海にあられもわかぬせな

百千首に眺望のこゝろをよみ侍りける

入道前太政大臣

稲の原浪にとまつよこく海の浦乃蘭わけ山のかせとかし

きこしらす

七条院大納言

みく海の浦その松の緑よりいつより行きぬ浪の白ゆふ

後京極摂政家百首歌に草木十首詠侍

寂蓮法師

風かはる海松くされ年を経ていつまてよりの峰の入しもの

家の十五首哥よませ侍りけるに暁霞浦といふ
心を読侍りける　中院入道右大臣

あけぬるとわたる舟もみえぬまてかすみは立こめわたりけるかな

和哥所哥合に海辺霞といふことをよみ侍ける
前内大臣

淡路嶋かすみにけれは世をへたてゝ霞をいとふ雲の旅人

題不知
よみ人しらす

しかのあまの塩やきたてゝ煙のうきもたえす我とかな

志賀の浦の遠方めくり塩やき衣の霞けのたえぬよ

前大僧正慈円

霞しく松浦のおきにこき出てもろこしまての春を見る哉

秋山鹿といふことをよみ侍りける
正三位家隆

あきらけき山文字ゆく秋風にかきたてゝ鹿のつまをとふらん

新勅撰和歌集巻第二十

雑哥

源顕仲朝臣乃家にて人々あまたよみ侍りけるに
に神祇述懐といへる心をよめる

源俊頼朝臣

やまとには名をうつしけれ吹上の岸宮海にも
木のうらの雲間をたゝく数さけハやまと(?)のよ
むもれなきあはれとぞ思ふまされのうら
ちかはなり今ハ我身をなけきつゝ何をつけくう
ゆくさきめん宮こにかけて家れの葉のうへに
流れなむそれはつけくや朝夕に何を祈人の
我をなりなん
御哥
ゆくすゑもはるかに見えしよのあはれ祇をまもるらん

久安百首哥奉りける時
皇太后宮大夫俊成

あはれとや風もまゝの風として吹つたへける
ことの葉ハ神の代より河とけ乃世々にながれて
まなし世にハ今もそこやの山の端故もあらまし
あはれをさしむかしれ語をたちあまたハ業れ来すなる

をさまれる　よ川の海も　なみたゝす　和らかなる人
数へひて　めくみの浦　たち渡る　幾世をまもれの
たのしさそ　言葉の外も　きこゆなる　これそと思ふ心
君か代は　あふさか河は　たえせぬ　みなさにかゝる
むかれまれ　吉川のらには　萬代人の　久(よイ)まれわかね
なけきとは　昔より　月の秋を　掛くはいふかし
かはらぬやま　峯の松　松か枝の　いくちとせしけ
あまくたる　水乃藻すゑ　かけ見えて　いはまかたわ
吉川なれそ　たえゆく水の　これされは　いはいる志ゆま
さしぬく　さまとこそすは　色をめつらし　よろこひの門は

ゆふこえり　なら乃志はま　おもひなく　さ(そ)れそらは
こゝにきて　秋ハ空あれ　うきのこゝ　露をれ袖と
いらぬとも　花よ人のなき　まれのとふ　うちなすわかれの
月のけむ　またくもかなは　なかめても　心あてにつけ
揚れさの　むかしさくらは　春のかと　のこさんまきを
あやなけは　なかれよも　法の国に　わかの志のふの
第りてゝ　すさひのそれ　なかゝつと　岩かゝ門流乃
あからぬ　かすみとの　かしこさに　入江のまえ
ゆきつめて　と御めんれは　みちのくのれ　志のかまちとの
みなれける　曲をかれ　梅やなめらん

雑哥

山川乃せゝらきさと濁さりハ志らぬ末の名やれ流れ

清輔朝臣

あら磯よ うれ身れ猶も 聞ゆれく 志のゝ志のふ

まらは(?)く あらへきこれ うれ身れ 世にもあられ

山のはす ひとつまつの ゆくゑなく 成にけるは

雲の奥よ ちりまにしひ さく花の まれなりけるま

いにしへは 人のあはれは あれとよふ うら見の程

うちわたる 谷のむもれ木 何ふまと 思ひそめく

たれ行の 末乃世まれ 志られまし うらみとや

年ハ学く さはる舟の さわらみ さりもあへぬ ねイ

あらしふきし 志賀と思へる まもなく 末れ下るれ

なく水乃 あはれなり まな世浮く うきあつまる

くちはてん うしもはかなき 伊勢の海の あまれなく家れ

なきれ世に さてめん事れ やさしかるへき

上西門院兵衛

君をそれ 嫌ハ身をれ ゆくゝに こゝろは深く

あくせまも 風まと漁ぬ なれせを ひとかへて

なかにも いはしき家よ まむ月の うき世にめぐる

なさしみ　あはれくれし　みかけしみ　つれなく遠の花と
かはらそく　教くれよき　よる晴の　かけさくらの
うひすさい　そらのしむ　水の相わ　ちるくさき
枝をすぬるを

権中納言通俊卿家にて旋頭歌よみ
侍りけるに恋の心をよめる
俊頼朝臣
逢ことを　まちわすれらる　あすのいさよひ
めくもの　みすゝ雨かよに
家より人にまうてきて旋頭歌よみ侍りける

猿の心をよめる　藤原顕綱朝臣
夢まつゆめ　霧たちよさん衣袖もなかくれ
なくさあかれ秋の枝そかきわり
百首歌よみけるに猿の歌
清輔朝臣
松の緑らさくひめもわたて相ひかり
心やいもか君にみかん
物名
やうたむと歌よみ侍りける
伊勢

風さむミとたく鳴かれの声にしわらさむ衣をうつやまさき
志賀小
うけこめし袖をさへつゝぬる涙乃玉乃数ハそれは
たえそさ　　　躬恒
まよあひすれぬ涙せつゝあさゆく衣ハそてしほる
ひとりねてさく
あさなりとひともとさく花のあたりに返りそは
知らむかし　　　二条太皇太后宮大弐
散るをみて(?)ぬかりのみ門はしたる鶴のつはさを何かれらん
すきれけり

風わくとわきても我ハ守なきたるさとのみそとしれ門
身かなる　　　権中納言定頼
立かへりなきとるをはらん空をへてかへりぬしゆくかた
ちれ乃花　　　俊頼朝臣
ちれ芽をはまてひとりみをくれたるひとをしのむをとれ
これ鴻のやしわ　　　ちるらん
あをしまこのまれにや白妙の雪にまつらはれたらん
久安百首よみたてまつりし時
大炊御門右大臣
大井河かはれむまれる花散るなかれもゆたかにせく

ごえのやまさ

左京大夫顕輔

はまれぬと時うたのめし言の葉に今もまかせていかゞ見えしや

かゝれしさ

清輔朝臣

むかしもつきせぬわかれにかはらぬ心さのさ◯かさらぬしきみ

あふけのそこ

花園左大臣家小大進

霜まつはかなくてあれなる名のみ君がかけのこゝろきえぬ◯ぬ

かへりことをうゆふ

従三位頼政

ひとむれはかるにきさ世の波の枕をたゝ人にしほ

こゝろなりしをとこゆふ

基俊

ちる紅葉なくしてふかきとめて谷のさかみやしこそと

秋のやまのを待ころかやまとことゝかゝ

後徳大寺左大臣

みなとも山ここに咲塩風に立し浪の松は浪やかゝらん

さむのこと

殷富門院大輔

かりねしし海のかりほに深夜さん袖ぞこの露よりつゆけき

帰る鴈をも仍よなり

源有仲

むかしみし山の里は荒まに浅茅が庭に鶉のなきまで

あこさらぬ花とのこすを人のまゝせ待ころか

鴨長明

色まさる男ハ野山にをのゝかよはしてきを鹿なる
吾つまてよ侍りけれハ権大納言公実許よりつかはし
ける　　　　　　　　　　　　俊頼朝臣
おもひあまりを小山田のくろをたもえてを
祈りいせくやそのまくらそいさいはふ
返しなきさらひ侍りける
堀河院御時殿上人あまたおよひ
ぶ朝臣出させ給てこれこそのかたを
かけ梅りまあと出せよ侍りけれハつゝ海

つりける　　　　　　　　　権中納言公経
うらめしくいかにひるさへ松のよはなれ
のこる
　　　　　　　　　　　　　　橘為房
此里は谷水の花くもり菊桜
清見かた梅の山をよそ侍りける
　　　　　　　　　　　　　　藤原朝臣
あまはすはなかれぬ花やまた白雪
庚申の夜あやめ草を折句によみ侍りける
　　　　　　　　　　　　　　二条太皇太后宮大弐
わか恋し八重の花をもいろくさて
かゝり

おかりし文字なれはとてよろこひ給ひけり
ある年に今ハかきれ孫なる人の病おこりて悩れけり
其の御よ定家にあひて給ひけれハそこに僧正
聖實ハさりけるをみてよろこひをつけく
其のうらへこそ給ひしと思へり給ひけれハその人
よまんとやてよみ給ひけり
大僧正親厳
さ月雨の日つもりつもるめくりしと峰への小松り
ちらくしてみる

国立公文書館
National Archives of Japan